

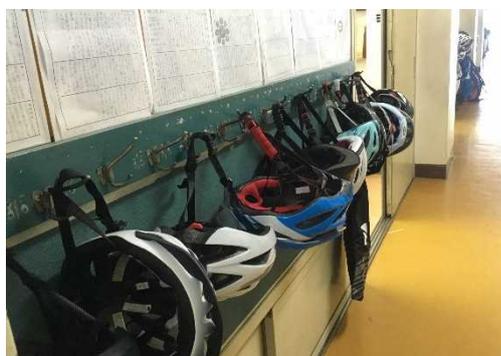
## 2019年度 教育福祉常任委員会他都市調査 報告書

日本共産党 大村洋子

2019年10月23日(水)～10月25日(金)

### 【千葉県市川市 塩浜学園の小中一貫教育の取り組みについて】

- ・塩浜学園は小学校と中学校が隣同士にあり、学校規模も過大ではなかった。そのような理由から小中一貫校が行いやすかったと言える。
- ・学区外からの登校はバスの児童もいる。2キロ以内であれば中学生は自転車通学をしている。



- ・来年2020年7月に新校舎が完成し9月には児童生徒が移動する。
- ・現在1年生から6年生までは単クラス、中学1年生にあたる7年生は3組、8年生は3組、9年生は2組。全生徒数は356名。
- ・中学1年生にあたる7年生は現在5校の小学校区から来ている。



- ・塩浜学園は千葉県ではじめての小中一貫校 2番目は成田市もある。
- ・児童生徒の中にはスーダン、韓国、中国、フィリピンのこどもたちもいる。日本語がわからない子もいるが、外国語翻訳アプリなどを使って工夫して授業を

している。

- ・塩浜学園の6年生は7年生になる際に卒業式ではなく「前期修了式」を行っている。しかし、現在は過渡期のため「前期修了式」があるがゆくゆくはなくなる。一方、他の小学校から来た生徒は1年生と7年生の入学式があるという。
- ・管理職は校長が2人、副校長1人、教頭1人の4人体制。
- ・はじめの頃はスムーズにいかないこともあったが、今では小中の先生方がお互いに分かり合えている。
- ・図書室には常駐の司書が1人いる。月、水、金と週3回の司書もいる。
- ・1年生から4年生は start/small・Sブロック、5年生から7年生は middle/medium・Mブロック、8年生、9年生は last/large・Lブロックとなっている。
- ・5年生から教科担任制となり部活動に参加する。
- ・「塩浜ふるさと防災科」という特別な教科がある。
- ・5、6年生は後期課程に合わせて50分授業を実施している。



- ・外国語の授業では4人のチームティーチングを行う時もある。
- ・人数が少ないため部活動が成立しない場合がある。そのため5年生から部活動に参加しているという向きもあるようだ。
- ・市費で先生を増やしている。
- ・生徒会活動に5年生からかかわりをもつ。
- ・行徳高校が隣接しているため高校生との交流も行っている。
- ・1年生と9年生など異学年交流も行っている。
- ・先生方は1年生から9年生までを見通した教え方を意識している。
- ・児童生徒の意識の変化としては 中1ギャップの解消が図られてきているという。中3の生徒が小3の児童の手をとって登校する姿も見かける。

- ・1年に2度「青空給食」があり、縦割りでお弁当を食べてコミュニケーションを図る。
- ・体育祭や合唱祭なども9学年で行う。
- ・現在プールがなく、水泳学習時1年生から6年生は10分くらい離れたところにある「スパ」に行く。

#### 塩浜ふるさと防災科

- ・義務教育学校では、設置者（市川市）の判断で、教育課程の特例を設置することができるため、9年間を貫くカリキュラムとしての教科の創設や、変更が容易になった。
- ・学年及び小中学校段階の指導内容の前倒しや入れ替え等も設置者の判断で可能となり、特色ある教育課程を独自に編成することができる。

#### 塩浜ふるさと防災科とは

各教科、領域等で身に付けた力を活用して、質の高い学びを創造する教科として、教育課程の中核に位置付け、推進している。

#### 目標

ふるさと塩浜の歴史や自然環境に触れて理解を深めたり、自然災害発生を想定し、それに備えて地域の方々と協力しながら自ら考え自ら選んで活動したりすることで、地域に誇りや愛着をもった思いやりのある豊かな心と、自主的に問題解決を行う、たくましい生き方を育む。

ふるさとに関わるもの 人間としての生き方に迫る 地域への理解と愛着を深める

防災に関わるもの 防災リテラシーを身に付ける 科学的理解を深める



## 広島県広島市

### 【認知症高齢者等保護情報サービス（QRコードシールの活用実態）について】

認知症になっても住み慣れた地域で安心して生活を生活できるよう、徘徊が繰り返し発生する認知症高齢者等について、「どこシル伝言板システム」を利用して、身元確認や引き渡しを円滑に行うサービス。

認知症高齢者等に、スマートフォン等で読み取ることのできる QR コードが印字されたラベルシールを交付するとともに、当該認知症高齢者等が徘徊行動により身元不明者として保護された場合に、QR コードを読み取ることで、発見者と家族等が対象の安否情報をインターネット上で共有し、身元確認や家族等への引き渡しを円滑に行う。

#### 利用の流れ

発見者が対象者の見守りシールに印刷されている QR コードを読み取る



事前に登録された家族等の（申請者）に QR コードが読み取られた旨の通知メールが送信される



発見者と対象者の家族等の間で、インターネット上の伝言板を用いて、保護された位置や対象者の健康状態等の安否情報を共有する。



保護された対象者の身元を確認し、家族等が対象者を迎えに行き、引き渡しが完了する。

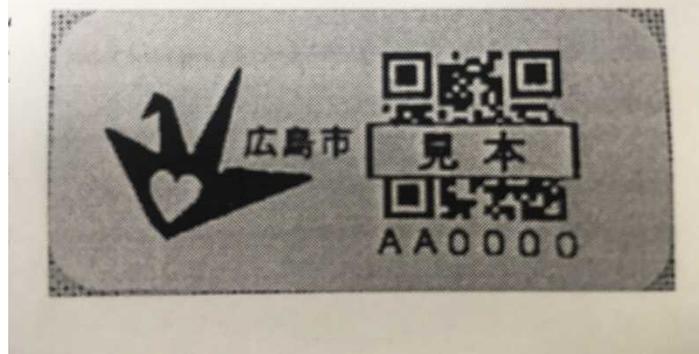
## 感想

広島市は人口110万人、高齢者率約25%。徘徊高齢者等SOSネットワークの登録者は約1,000人。そして、昨年2018年11月からはじまった「どこシル伝言板システム」QRコードの登録者は47人とのことだった。

47人という登録者数はあまりにも少ないなあと感じた。お話の中では周知も行われているようだが、なかなか増えていかないといった印象をもった。

議論のあるところだと思うが、私自身は認知症の高齢者の持ち物や衣服にQRコードを付けるということに違和感を覚える。その違和感の底流には人権侵害に抵触するのではないかと感じる。それが管理だ。高齢者を監視するという感じがする。長きに渡り日本を支えてきてくださった高齢者に対して敬意を払うべきであるのに、QRコードをスマートフォンで読み取って情報がわかるというハイテクノロジー、認知症を患っているご本人そっこのけで情報が飛び交うことにどうもすっきりしない。こういうモヤモヤ感が登録者数の少なさに反映しているのではないか。考え過ぎだろうか。人が亡くなるその時まで尊厳をもって生きるとはどういうことだろうか。考えさせられた。

徘徊が繰り返し発生する認知症高齢者  
テム」を活用し、認知症により徘徊行  
の情報を携帯電話等で読み取ることの



## 愛媛県西条市【小中学校 ICT 教育推進事業について】

- ・総務省、文部科学省からの委託で行った事業。
- ・民間の力もかなり入っている。マイクロソフト、リコー、四国通研。
- ・西条市は農業、漁業、林業、工業と多彩であるが、大学がないため、人口流出は避けられない。

- ・現在の世界は第4次産業革命の真ただ中という概念

Society1.0 →狩猟社会

Society2.0 →農耕社会

Society3.0 →工業社会

Society4.0→情報社会

Society5.0→超スマート社会

- ・昔のような「読み書きそろばん」ではない。

「何を教えるか」 → 「何ができるようになるか」が問題となる。

- ・日本の施策・方針

急速に進むグローバル化への人材育成が必要とされる。

・NY州立大学院センターのキャシー・デビッドソン教授は「2011年に小学生になったこどもの65%は将来、今は存在していない職業に就く」と言い、オックスフォード大学のマイケル・A・オズボーン准教授は「今後10年～20年で、半数近くの仕事が自動化される可能性が高い」と言っている。

- ・世界からみると日本のICT活用は遅れている。



上記のような背景をもち西条市としては市長の公約でもある

「ICT技術を活用したスマートタウンの構築」を具現化することを目指した。



その中でも「教育環境の充実」として以下の3点を行っている。

- ・ICT教育推進事業
- ・バーチャルクラスルーム
- ・スマートスクール実証事業

・ベネッセと委託契約をして、市内在住のICT支援員を10名雇用し市内の小学校35校を回りICT教育の支援体制をとっている。

・学校の先生方も約800名の半数ほどがテレワークをしている。

・ICTを活用し、問題発見力、コミュニケーション力、批判的思考力、協働力、問題解決力、プレゼン力を学ぶ。

・先生方もICTを活用して校務支援システムを活用している。

- ・成果を明確化し、国に報告し、予算確保の根拠としている。
- ・西条市では授業と公務の情報化、クラウド化を進める中で、パブリッククラウドである「マイクロソフト・アジュール」と接続している。

#### バーチャルクラスルーム

- ・総務省と文部科学省から 100%の財源。というより、西条市がモデルとなっている。
- ・スタート時は合併特例債の活用もあった。
- ・4つの小学校の多目的教室に設置
- ・最初は抵抗感もあったが、ICT 支援員のサポート体制があり、一体となって進めていった。
- ・西条市がこのような「バーチャルクラスルーム」にチャレンジした背景は人口過小地域における教育の課題があったようだ。
- ・1年生から6年生までがすべて単学級という学校の状況から、より多くとかがわりを持てるようにと、学校間の交流の可能な「バーチャルクラスルーム」が始まった。
- ・難しい点は授業進度を合わせなくてはならない点。
- ・「セキュリティ」「法」「技術」が「壁」

#### 児童の感想

- ・すぐとなりに他の学校の人がいるような気が本当にして、とても不思議な気持ちになった。
- ・中学生になったら一緒に勉強するので、早く仲良くなれて良かったと思う。

#### 先生の感想

- ・競り合いの少ない本校の児童にとって、合同学習は視野が広がる大きなメリット。中1ギャップの解消、複式学級の解消にもつながる。

#### 保護者の感想

- ・私たちの地域を誇れるような教育、生活に、ICTの技術をどんどん生かしてほしい。

#### 地域住民の感想

- ・大きな時代の流れを感じる。人数が少ないという欠点は気にならなくなるのでは。
- ・今後の展開がとても楽しみ。

\*西条市の教育の情報化の取り組みを視察して感じたこと  
最も驚いたことは「バーチャルクラスルーム」だった。以前から遠隔で会議を行うというのは聞いたことがあるが、それが授業にまで応用されるようになって

いるということだ。みなさんの感想でも総じて肯定的、歓迎の言葉が多い。集団が形成できないという悩みのある小規模校がお互いにその課題を克服するために、遠隔でも交流できるというのは本当に画期的だと思う。そのような大きなメリットがある一方で、財政面が気になった。今は総務省と文部科学省から国庫支出金が支給されるが今後はどうなるのだろうか。莫大なランニングコスト、システムの維持費はどのように受け止めれば良いのか。そして、西条市だけではなくて、全国の自治体にも普及するのだろうか。せんじ詰めれば憲法第 26 条の教育の無償化と教育を平等に受ける権利が問われる問題だと感じた。